

現代社会と若者たちを活性化する15のキーワード

国際双方向“交流”

14

「物見遊山」ではない 参加型の異文化体験

「イェロアメリカナ大学に留学して、高校までやってきたサッカーを思い出ししました。それで練習を見学に行き、監督に話してみると『日本人はタメ、大会にも出られない』と冷淡な態度。そのまま引き下がるのも悔しいので、『取りあえず練習だけでもさせてくれ』と。翌日、練習場でボールを蹴っていたら監督が手招きするわけです。すると『キミに興味を持った、入部していい』。すぐにレギュラーになつてあちこちでプレーしました。後で聞くと『イェロ初の外国人プレーヤー』だったそうです。いやあ、中村俊輔の気持ちがよく分かりました(笑)」

こう語るのは、専修大学法学部法律学科の大西英朗さん。期間は別にして、留学体験を持つ人は少なくないはずだが、現地でスポーツクラブに入部、さらにレギュラーになったというケースはまれだろう。しかし、彼ほどで



協定校からの留学生を対象とした「日本理解プログラム」

スタントも制度化されており、日本人学生との交流も活発に行われている。交換留学を受け入れる大学は数多いが、どうしても外国人は外国人同士になりやすく、特定の交友関係に留まる傾向が強い。専修大学ではこれを避けるために、キャンパスアシスタントやボランティアを公募。学内にもかなり浸透しており、国際交流・異文化交流に関心のある学生が多数応募している。

さらに、この留学生たちは生田キャンパスにある国際研修館で生活しており、自ら泊まり込みのボランティアで面倒を見るレジデントアシスタント(RA)制度もある。そうした活動の中心的存在が、国際交流サークルSHIP。130人以上の学生が参加しており、歓迎会など各種のイベントを運営している。代表の山岡太郎さん(経営学部経営学科)は「ニュージーランドのワイカト大学に3カ月留学して、国際交流に目覚めました。自分の経験から、彼らを知りたいこと、必要なことがよく分かるので、帰国後にSHIPに参加しました」と言う。

金融はもちろん、企業活動もボーダーレスになっており、大学の国際交流や留学は当然のことといつていい。だが、その中身は「放任交流」「放任留学」というケースも少なからず見られる。専修大学では、敢えて提携大学を絞り込むことで、派遣学生と受け入れ学生双方に丁寧なケアを行っている。大学と学生による、密度の高い、本来的な国際交流が実現しているのだ。



国際交流センター長、商学部教授
大林 守

「イェロアメリカナ大学に留学して、高校までやってきたサッカーを思い出ししました。それで練習を見学に行き、監督に話してみると『日本人はタメ、大会にも出られない』と冷淡な態度。そのまま引き下がるのも悔しいので、『取りあえず練習だけでもさせてくれ』と。翌日、練習場でボールを蹴っていたら監督が手招きするわけです。すると『キミに興味を持った、入部していい』。すぐにレギュラーになつてあちこちでプレーしました。後で聞くと『イェロ初の外国人プレーヤー』だったそうです。いやあ、中村俊輔の気持ちがよく分かりました(笑)」

こう語るのは、専修大学法学部法律学科の大西英朗さん。期間は別にして、留学体験を持つ人は少なくないはずだが、現地でスポーツクラブに入部、さらにレギュラーになったというケースはまれだろう。しかし、彼ほどで

「交換留学生が母国に戻り、語学インストラクターになって再び専修大学に来るといふこともありませう。このように交流密度が高いのは、敢えて協定校を13カ国19大学に絞った結果だと思えます。協定校は数が多ければいいというものではなく、相互に親密な関係がなければ、心配で学生を送り出せません。これからも、国際交流とは人間同士の交流と



「留学時にサッカー部で仲間たちと濃い経験ができたので、就職面接ではネタに困ることはありませんでした。メキシコは、とにかく何もかも日本と違います。いいことも悪いことも、呆れたことも数々ありますが、それがメキシ

に意欲さえあれば、いつでも海外に飛び出していける。そして、実は専修大学のキャンパスの中にも、こうした意欲につながる国際交流のチャンスがあるのだ。

国際交流サークルと ボランティアが 留学生を支援

教室には外国人学生と日本人学生が4人ひと組で10組。ある日本人学生は電子辞書を片手に、カタコトながら英語で懸命に仲間からの質問に答えている。

これは協定校からの留学生を対象とした「日本理解プログラム」のヒトコマである。9月から約3カ月にわたって日本語、日本文化、ビジネスを学ぶのだが、教員が教えるだけでなく、専修大学生も参加するのである。彼らに大学の近隣を案内したり、鎌倉ツアーなどに同行するキャンパスアシ

「希望していた大学に不合格だったことで、入学当初は落ち込んでいました。5月頃に韓国

「目標はパイロット。そのためには英語が必須なので、今年、アメリカ・イリノイ大学アーバナ・シャンペイン校に1カ月留学しましたが、『伝えることの難しさを実感。それに日本に関する知識も必要だと思いました。やり残したことや新たな目標も次々できて、今度は絶対に長期留学すると決心。ライフセービングの活動をしながら、TOEFLのスコアアップに挑戦しています。度胸はだいぶいたようで、帰国後は両親の知人の外国人に東京案内をかけて出たり、人を楽しませようという気持ちになりました。生田キャンパスに行くためには長い坂を登らなければなりません。でも、だからこそ素晴らしい景色に出合えます。人生もきっと同じですよ」



「目標はパイロット。そのためには英語が必須なので、今年、アメリカ・イリノイ大学アーバナ・シャンペイン校に1カ月留学しましたが、『伝えることの難しさを実感。それに日本に関する知識も必要だと思いました。やり残したことや新たな目標も次々できて、今度は絶対に長期留学すると決心。ライフセービングの活動をしながら、TOEFLのスコアアップに挑戦しています。度胸はだいぶいたようで、帰国後は両親の知人の外国人に東京案内をかけて出たり、人を楽しませようという気持ちになりました。生田キャンパスに行くためには長い坂を登らなければなりません。でも、だからこそ素晴らしい景色に出合えます。人生もきっと同じですよ」